

日本における初期の小児科領域

についての一考察

安達原 曄 子

医心方は現存する日本の医学書の中では最古のものと考えられており、それを検討することにより、当時の日本の医学の状況が伺い知れる。小児科領域について特に考察してみた。医心方は中国の医学書のいくつかからそのまま抜萃した部分ですべて成り立っているが、どのような医学書から抜萃されているかを現存する中国古典と比較し、現代の小児科の立場から検討を加えた。

小児科領域においても、医心方の他の部分と同様に千金方からの引用が最も多い。しかし、千金方では婦人、小児の処方男子、成人の処方よりも先に記載しているのに対し、医心方では従来どおり成人のあとになっている。

記載の順序は、新生児期の問題からはじまっており、頭部の主として皮膚疾患、顔面すなわち耳、目、口腔、唇、舌、歯、鼻、喉、の疾患の治方、嘔吐、腹痛、痞病、脱肛

の治方、といったように身体の上の部分から下のほうの疾患について記述され、その後に癩病、夜啼、傷寒、卒死、下痢、便秘、遺尿、黄疸などから、誤飲にいたるまで記載されており、この記載の仕方は中国の医学書よりも規則的である。

新生児期に関しては19の項目別に細かく分けて記載がなされており、その項目のもとに、千金方、外台秘要方、諸病源候論、そして今はないが産経、小品方などの諸々の部分から抜萃して、病理、症状、治療、と記載しようとする努力がみられる。分類の仕方は中国の教科書よりも見やすいものとなっている。

現代からみると非科学的と思われるような嬰兒の命名の仕方が記載されていたり、呪術的なことが産経から引用されたりしている。しかし、千金方から引用されている部分は臨床にすぐに役立つような部分が多いのがみてとれる。

独創的なところは、病理や治療に関しては全くみられないわけだが、実際に利用しやすいようにと、その記載の仕方には工夫がかなりみられる。

(国立東京第二病院)